

# 国語

(古文・漢文を除く)

平成26年10月19日実施  
100点満点

医療福祉専門学校

# 緑生館

平成27年度

- 総合看護学科
  - 理学療法学科・作業療法学科
- 推薦1期・一般1期入学試験問題

[注意事項]

- 1 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子は23ページあります。問題は第1問～第2問まであります。
- 3 ページの脱落や印刷不鮮明な箇所を見つけた場合には、すみやかに申し出て下さい。
- 4 解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては、受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。
- 5 解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり、薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば、問題の文中または文末等に **35** の表示のある問いに対する解答は、下の(例)のように解答番号 35 の解答記入欄に正確にマークして下さい。その際、解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

(例)	解答番号	解 答 記 入 欄				
	35	1	2	3	4	5
		<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

(悪い例)

1	2	3	4	5	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
1	2	3	4	5	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
1	2	3	4	5	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
1	2	3	4	5	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	塗り残し
1	2	3	4	5	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	はみ出し
1	2	3	4	5	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	消し残し

6 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから、[注意事項] を正しく守って下さい。とくに、訂正する場合には消しゴムでていねいに消し、消しきずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

## 第1問 次の文章を読んで、後の設問（問1～7）に答えなさい。

今、言葉を大切にしようとする多くの人が言う。言葉を愛しましょう、言葉を守りましょうと多くの人が言う。その場合、根本の問題は、その大事な素晴らしい言葉というのは、実はそのへんにごろごろ転がっているあたりまえの日常の言葉なんだということに対する徹した認識があるかないか、ということだろう。そのへんに転がっている当たり前の言葉以外に、素晴らしい言葉なるものはないんだということに気がつくと、私たちの口をついて出てくる一語一語の大切さが、心からわかつてくるということにもなる。どこか別の場所に、万人が一せいに認めるような、誰が見ても素晴らしいという特別な言葉があつて、それを崇め奉っているのが言葉を愛することであり、言葉を大事にすることであるならば、こんな簡単な話はない。よく、

「詩を書くことと思つても、語彙が貧弱で……」

と言う人がいる。私はつねづねそういうことがありうるものかどうか疑わしく思っている。自分以外のどこかに「語彙」の宝庫があるかのように聞こえるからだ。問題<sup>(1)</sup>は紛糾していないのに野望が紛糾している一例ではないかと思う。

日常用いているありふれた言葉が、その組み合わせ方や、発せられる時と場合によって、とつぜん凄い力を持った言葉に<sup>(2)</sup>変貌する。そこにこそ、「言葉の力」の<sup>(3)</sup>変幻ただならぬあらわれがあり、そこにこそ言葉というものを<sup>(4)</sup>用いることの不思議さ、恐ろしささえあるということだ。

なぜそういうことが生じるのだろうか。

結局のところ、事柄は次の一点に帰着するだろう。つまり、われわれが使っている言葉は氷山の一角だということである。氷山の海面下に沈んでいる部分はなにか。それは、その言葉を発した人の心にほかならず、またその心が、同じく言葉の海面下の部分で伝わり合う他人の心に他ならない。私たちが用いている言葉は、<sup>(2)</sup>そういう深部をほんのちよつぴりのぞかせる窓のようなものであつて、私たちはそれをのぞきこみながら相手の奥まで理解しようとたえず努めているのである。現代の作品を読む場合でも、自分が非常に感動したある作品を、他人が、なんだこれは、つまらない、と言ひ捨てるのは、その人には、たまたま言葉の氷山の下側の部分の面白さが感じとれないからである。

右のようなことは、別に目新しい意見でもなんでもない。古代のインド人は、もつと上等な言い方でそれを説明している。<sup>(註1)</sup>バラモン教の聖典『リク・ベエーダ讃歌』の中に、宇宙創造に関連して、言葉は「四個の四分の一」から成るといふことをのべた一節がある。つまり、言葉には四種類ある、そしてそのうち三つは秘密に隠れている、というのである。この謎めいた言語論について、私は以前次のような解釈を読んだことがある。つまり、最初の四分の一は、絶対者そのもの、第二に絶対者が自己自身を実現しようとする言葉、第三に、絶対者が自己を表現しようとする言葉、そして、第四に、これだけが外部に発せられるところの、われわれ人間が通常用いている、いわゆる言葉。古代インド人の思想の論理癖がいかなく<sup>(1)</sup>發揮されている考え方だが、含蓄豊かな考え方だと思ふ。

インド人のこういう考え方は、詩というものについて考える習性のある人には、強く直感的に訴えてくる力を持つ思想だと感じられるだろう。詩だけでなく、音楽について心をひそめても、あるいは絵画とか彫刻とかについて考えても、同様の感じがあるのではなからうか。少なくとも、この『ベエーダ』の考えをもう少し類推作用によって押し拡げ、適用範囲を拡げてみると、次のようなことが言えよう。つまり、目に見えるもの、聞こえるものの世界は、それだけでは決して世界のすべてではないということである。

二百年近く以前のドイツの詩人ノヴァーリスが—この人は二十代で<sup>(註2)</sup>夭折したが—書き遺した本に『断章』がある。そのなかに

は、自然科学や哲学や魔術その他、百科全書的な分類のもとでの思索の断片がおびただしく連ねられているが、その中に私をびつくりさせた言葉がある。

見えるものは見えないものにさわっている。聞こえるものは聞こえないものにさわっている。それならば、考えられるものは考えられないものにさわっているはずだ。

これは詩人の直観がとらえた大変に深い洞察をあらわしている言葉である。つまりわれわれが考えることのできるものの世界は、限られていてささやかである。しかし、その考えられるものが考えられないものにじかにさわっているということは、言い換えれば、有限なるもの、ささやかなものがじかに無限なるものにさわっているということである。いかにも詩人の直観的な表現だが、ある神秘的な拡がりを秘めている。

哲学者がこれを読めば、そこに哲学的瞑想への貴重なきっかけが得られるかもしれないし、またたとえば画家がこういう考えに打たれたなら、ひよっとして一生の転換になるような美術観の変化というものが生じるかもしれない。見えるものにさわっているという見えないものを、どうやって画面に描くか。音楽家にとっても、聴こえるものにさわっているという聴こえないものを、どうやって音楽の世界のものにするか。すべて、難問である。しかし、創造的な刺激を秘めた難問である。そして、ここであらためて気づいて驚かざるを得ないのは、ノヴァーリスがこの奥行きのある思想を語るのに、まことにささやかな言葉しか用いていないということである。彼はあたりまえの言葉を使つて簡潔に書いている。しかしそこで語られている思想は、豊かな展開の可能性を秘めている。

このように見てくると、私たちがしばしば用いて語るコミュニケーションという言葉についても、若干ふれておきたくなる。

<sup>(3)</sup> 私は、日常生活においてはもちろん、文章の中でも、よほど必要にせまられた場合でないと「コミュニケーション」という英語を用いて語りたくないというやや偏見の態度をもっている人間である。思うに、人の心と心のふれ合いということ語るためには、コミュニケーションという外来語はあまり役に立たない。また、コミュニケーションという言葉を用いて論じられる領域では、

大前提として、人の意思は伝わらないより伝わるほうがよい、しかもより速く、広く伝わるほうがよいという善意の考え方があると思われるが、私は人間というものにもう少し別の暗闇があることのほうを大切に思っているので、コミュニケーションというピカピカした言葉になじめない。コミュニケーションは訳せば「伝達」とか『通信』という意味だが、人間の気持ちというものはそんなに簡単に伝わるものではないという、われわれが体験的に知っている事実は、なかなか大切な問題を示しているのではないだろうか。最も相手に伝えたい気持ちは、最も言葉にしにくい微妙な複合体なので、大事なことほど簡単に伝わりにくいものだということが一般に言える。さらにこれを押しさえれば、そんなに簡単に人に気持ちを伝えようとしないう方がいとさえ言えるのではないか。<sup>(4)</sup> 誤解の余地が常にあることのほうが、人間であるという条件に対しては忠実な生き方だという気がする。そこから生じる悲しみや憤りを含めて、そういう気がする。

ある思いを簡単に伝えるということは、能率という観点からすれば無条件によしとされることであろうが、人間は能率のみによって生きるわけではない。能率の奴隷として生きることが人間の幸福であるわけではない。人と人との間をつなぐ最も重要な通路に言葉というものがあって、それが「コミュニケーション」をも生むものだが、言葉にはよくわからない部分があつていいのだ、というのが私の考え方である。言葉の通路には薄暗がりがあるほうがいいのだ。なぜなら、人間というものは、そんな薄っぺらなものではないと思うからである。もちろん私は、コミュニケーションの理論やその広範な応用について頭から反対しているわけではない。ただ、人間は「コミュニケーション」を拒否することにおいて人間そのものである場合もある、という事実に関心を寄せずにはいられないだけである。

ある人間、ある事象に対してかたくなに拒絶的な態度をとることによって、かえって<sup>(5)</sup> 鮮烈に考えや気持ちを伝えることができることもある。そういう点から眺めると、人間の心には、無数の扉があつて、ある扉は絶えず開かれたり閉じられたりしているのに、一生に一度か二度しか開かない開かずの扉もまたあるという風に思われてならない。その開かずの扉を開くか開かないかということは、その人にとっては大事件なのである。その開かずの扉が何らかのきっかけで開くときに生じる他者との全く新しい関係、

それこそが、かけがえのない「コミュニケーション」の姿のように思われる。それは、ある心と別の心との間に、とつぜん新しい橋がかかることにほかならない。それが人を幸福にするかしないかは一概に言えない問題だが、少なくともその瞬間、人は自分自身について、あるいは相手について、新しい発見をする。暗い部分に光がさしこむ。つまり、ノヴァーリスの言葉にもどって言えば「見えるもの」にさわっている「見えないもの」が見えてくる。私たちは日常おびただしい「コミュニケーション」の網目の中で生きながら、心の底ではたえずそういう瞬間、この「もう一つのコミュニケーション」を渴き求めているのではないだろうか。まあそういう出来事があまりしょっちゅう重なっては、かえってくだびれてしまうということもあるので、開かずの扉はなるべく開かないほうがいいという気持ちも一方ではあるほどだが、詩とか芸術とかいうものは、言ってみればこの開かずの扉を何ものか大いなる力の助けによって開けていこうという衝動に支えられているものであろう。

結局、言葉というものの大切さは、それが人間のこういう思いに最も深く関わっているものであるという点にある。言葉が、そのものとして絶対的に大事だということではない。もちろん、言葉は人間の大事な持ち物だが、それは言葉というものが、なぜかわからないけれども、人間の中に思想や感情を呼び起こす力をもっているものだからであって、一語一語を物神崇拜的に崇めてみても、<sup>(5)</sup>言葉の命にふれることはできない。

(大岡 信「言葉の力」より)

(注) 1 バラモン教Ⅱインドで仏教が起る以前にバラモンを中心に発達した民族宗教

2 ノヴァーリスⅡ十八世紀ドイツの初期ロマン主義詩人

問1 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 1 ～ 5

(ア) 変貌 (ヘンボウ)

1

- ① ボウキヤクの彼方
- ② ボウキヨに出る
- ③ 彼女はビボウだ
- ④ 生体のカイボウ

(イ) 發揮 (ハツキ)

2

- ① キカクに適った製品
- ② 仏教にキエする
- ③ 楽団をシキする
- ④ キチヨウな意見

(ウ) 思索 (シサク)

3

- ① 辞書のサクイン
- ② 人員をサクゲンする
- ③ 手痛いシツサク
- ④ 期待と不安がコウサクする

(エ) 洞察 (ドウサツ)

4

- ① 客をユウドウする
- ② 地中にある大きなクウドウ
- ③ 機械をカドウする
- ④ 美のデンドウ

(オ) 鮮烈 (センレツ)

5

- ① 川がオセンされる
- ② 研究にセンネンする
- ③ 就職をシユウセンする
- ④ センメイな色彩の絵を描く

問2 二重傍線部①～③の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 

6
---

 ～ 

8
---

① 変幻ただならぬあらわれ 

6
---

- ① 平凡なものが突然全く異なるものとして現れ出ること
- ② 平凡ではあるが様々なものが次々に現れ出ること
- ③ 特殊なものが繰り返し現れることによって平凡なものに変質すること
- ④ 特殊なものが環境に適應することによってより特異なものになること

② 夭折した 

7
---

- ① 予期せぬ病気により急死した
- ② 有り余る才能を持ちながら早死にした
- ③ 不慮の災害にあつて横死した
- ④ 世の中の急激な変化の中で憤死した

③ この奥行きのある思想 

8
---

- ① 音楽家の創造性が表れている音楽観
- ② 画家の新しい工夫に満ちた美術観
- ③ 哲学者の人生の真理に触れた言語観
- ④ 詩人の深い考察が明確に表れている世界観

問3 傍線部(1)「問題は紛糾していないのに野望が紛糾している一例」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の

中から一つ選んで、番号で答えよ。解答番号は 9

- ① 目的が曖昧で、それに至る手段も見いだせないでいる例
- ② 目的が明白であるうえに、それに至る手段も適切である例
- ③ 目的は明白であるのに、それに至る手段がそぐわない例
- ④ 目的は曖昧なのに、的確な手段により目的が定まってくる例

問4 傍線部(2)「そういう深部をほんのちよっぴりのぞかせる窓のようなもの」とあるが、この部分の比喩の説明として最も適当

なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。解答番号は

10

- ① 表現された言葉はその人が心の奥で考えていることを窺い知る手がかりであること
- ② 表現された言葉はその人の心の奥に秘められている考えを他者に伝達していく媒体であること
- ③ 表現された言葉はそれに触れた他者の反応によって他者の心の奥を知る手段であること
- ④ 表現された言葉は他者の心の中に秘められているものを受け入れていく間口であること

問5 傍線部(3)「私は、日常生活においてはもちろん、文章の中でも、よほど必要にせまられた場合でないと『コミュニケーション』という英語を用いて語りたくないというやや偏見的な態度をもっている人間である。」とあるが、筆者が自分をこのように認識している理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。解答番号は

11

① 筆者は、詩人として日本語を大切にしており、十分な検証もせずに安易に、「コミュニケーション」という目新しい英語を使うのに抵抗があるから

② 筆者は、日常生活において「コミュニケーション」などの外来語が極く当たり前のこととして頻繁に使用されている日本語の現状を嘆かわしく思っているから

③ 筆者は、気持ちを他者に伝達するのは非常に困難であると考えているが、「コミュニケーション」という言葉を使用するといとも簡単に伝達できるかのように錯覚してしまうから

④ 筆者は、人間の気持ちは計り難いもので言葉では表しにくいと考えており、人間の意思は言葉で伝わるという単純な前提で使用される「コミュニケーション」という言葉に馴染めないから

問6 傍線部(4)「誤解の余地が常にあることのほうが、人間であるという条件に対しては忠実な生き方だという気がする。」とあるが、筆者がこのように思う理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

12

① 人間は、存在そのものが不条理なものであり、そこから生じる悲痛や憤怒を言葉によって表現しても合理性に欠け、正確に伝達するのはいから

② 人間は、目に見えない奥深いものを秘めた存在であり、そういう人と人をつなぐものとして言葉があるのであれば、理解し難い部分を有するのは避けがたいことだから

③ 人間は、常に変化する存在だから、ある時点で発した言葉の意味も刻々と変化していくもので、言葉によって人の心は簡単に伝えられるものではないから

④ 人間は、社会との関わりの中でしか生きることのできないものだから、周囲からの影響を遮断できず、個人の気持ちを言葉で的確に採り出すことは不可能なことだから

問7 傍線部(5)「言葉の命」とあるが、筆者の考える「言葉の命」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次

の中から一つ選んで、番号で答えよ。解答番号は

13

- ① 言葉が持つ意味に気付かせ、その意味を深めることで人間の精神世界を高めていく言葉の持っている力
- ② 孤絶から人間を救い、他者と苦しみや悲しみを共有して現実を切り開いていく言葉の持っている力
- ③ 人間を、普段気づいていないものに触れ、新しい考えや感覚に目覚めさせていく言葉の持っている力
- ④ 詩人が言葉によって表現した世界に人間を誘い、感動させ、生きる勇気を与える言葉の持っている力

## 第2問 次の文章を読んで、後の設問（問8～14）に答えなさい。

格差社会の時代が到来して、いよいよ生きるのが大変になるらしい。心配する向きが多いと聞きます。

私は世のあれこれには、積極的に興味を持つ方ではないので、人がそんなことを言い出すようになってから、何となく気をつけて見るようになる。たいていそんな具合です。それでその「格差」という言葉を、小耳にはさむようになって、どれくらいになるのかしらね、気をつけてみると、なるほどそうなものかもしれない。少しずつ気がつくようになりました。

用がなければあんまり外には出ないのですが、たまに街に出た折など、イヨウに高級な乗用車に（それがロールスロイスであるということくらいは、さすがにわかりますね）、三十前後とおぼしきカッコイイ青年が乗っているのを見る。ははあ、これが言うところの「セレブ」という人種の人だな。

いったいどんな仕事をしているのやら。

端的にそう感じて、それでおしまい。

だって、まともな仕事をしているのなら、そんなことあり得ないもの。

あるいは、「格差」を気にする向きには、ああいった人々、「セレブ」「勝ち組」といった人々が羨ましい、自分もああなりたい、という思いが、どこかにあるのかもしれない。だけど自分の先行きを予想するに、どう予想したって負け組だ。そこに生じる焦りや不安が「格差社会」のトウライを言うことになっているのかもしれない。

だけど、どうなんでしょう。セレブな人が羨ましいといつて、その何が羨ましいのか。一度反省してみると、これはあんがいすつきりしますね。だって、挙げてみたって、せいぜいが豪華な車や豪華な家、その他もろもろ、つまりせいぜいが豪華な生活じゃないですか。たかがそんなもんじゃありませんか。そんなもの、どうだっていいと私は感じる。いま普通に生活できているんだから。

「いま普通に生活できている」、これがどの程度のことを言うのか、私にはわかりません。「こんな程度」ということを、言うこ

とができるとは思えません。三度の食事を食べられていても、もっといいものを食べている人がいると思うなら、それだけでその人にとってその食事は「普通以下」ということになるからです。衣、食、住、どれも同じ、すべてそう。「あの人がいい」。だとしたら、「格差」というのは、ひょっとしたら、外にあるのではなくて、内にあるもの、その人の心の中にあるものではないか。<sup>(7)</sup>ヒカクする心そのものではないか。

私はまだ「食うにも困る」ところまではゆかないので、これはちょっと断言できませんが、あるいは実際に、「食うにも困る」人々が、現代日本にも出現しているのかもしれない。だとしたらそれは大変なことだ。生活すること、生き延びるということは、本当に大変なことだ。だけど、そんな時、私ならこんなふうを考えてみるのだ。

かつての身分制社会の時代は、もっと大変だった。あるいは現代でも、インドのカースト社会なんてのものにも凄いものがある。そういうもつと大変な時代、大変な場所に、たまたま自分は生まれなかった。

この「たまたま」というのが、こういう考え方をする場合の<sup>(8)</sup>ミソでありまして、実際、なぜ自分はここに生まれて、あそこに生まれなかったということは、考えても、理由がない。理由が見つからない。ということは偶然である。したがって絶対である。

<sup>(1)</sup>この、偶然的なことが絶対的であるという原点に気がついていると、自分の人生に、言ってみると、<sup>(9)</sup>腹が据わるんですね。人と比較するということがなくなるんですよ。だって絶対なんだから。自分の人生はこうであり、これ以外ではあり得なかった。こうわかつているなら、あとは黙っていきるだけだ。

だからそれが大変なんでしょうが。

言いたくなります。むろんです。でも、<sup>(2)</sup>その大変さが、大変でありながら、ある意味では大変でなくなるんですよ。

どういうことかと言いますと、「たまたま」私はここに生まれて、あそこに生まれなかったということを裏返せば、ここに生まれずにあそこに生まれることができたということだからです。偶然とは、まさにそういうことです。だから、カースト社会の<sup>(10)</sup>マツタンで飢えているのが私なら、六本木ヒルズでセレブな暮らしをしているのも私だ。誰も彼もが私であり得るのだけれども、なぜ

だか私はここでこの人生をやっている。だとしたら、今のこの私の人生なんてものも、まったく相対的なものじゃないか。

絶対的ゆえに相対的。

I

実際、人が自分の人生に苦しくなるのは、今のこの人生がすべてで、これしかないという仕方だと思っただけで、これしかないという仕方で絶対だと思っただけで、う。そう思うから、それを自分で何とかしようともがくことにもなる。

でも本当はそうじゃないんですね。自分の人生がこんなふうだなんてのは、たまたまのことなんです。たまたまこうなだけなんだから、それを自分でどうしようとか、頑張ることはどうもないようなんですよ。本当は。

だけど問題は生きるか死ぬかなんですよ。

言いたくなります。むろんです。でもその生きるか死ぬかの問題を、よく考えてみると、どういうわけか、こういうことになっちゃってしまうのだから、<sup>(3)</sup> 人生とは妙なものだ。

もし生きるか死ぬかということであれば、文字通りの生きるか死ぬかの時代があったわけでしょう。<sup>(4)</sup> ゲンシ時代、戦国時代、先の戦争の時代なんか、ほんのきのうのことでしょう。食うか食われるか、殺すか殺されるか、明日をも知れない命を、我々は生きていたわけです。いや特攻隊員の命なんて、明日をも知れないどころじゃない、明日には「ない」ということが確実に知れている。そういう命だったわけです。そういう命のあり方に思いを致すことが、そんなに難しことでしょうか。格差社会を生き延びるのが大変だなんて言いたくなったら、特攻隊員として敵艦に突っ込んだ時の気持ち、思い出してみるのがいいのだ。

どうも私は万事につけ、極端に考える癖があります。でも、<sup>(4)</sup> 考えにおける極端が、暮らしにおける中庸として現われるなら、おそらくそれは間違っていない。すべてを相対化する絶対的な視点から「たまたま」こういう時代である。とこう気がつく、人はすごく広い所へ出られます。これはなかなかいい感じ、たいそう自由な感じですよ。

(池田晶子「『たまたま』のこの人生」より)

問8 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 14 ～ 18

(ア) イヨウ

- 14 ① 畏敬の念を抱く  
② 彼を慰留する  
③ 異郷をさまよう  
④ 違和感を持つ

(イ) トウライ

- 15 ① 音楽に陶醉する  
② 用意が周到である  
③ 友の死を哀悼する  
④ 仏前の灯明

(ウ) ヒカク

- 16 ① 匿秘の情報  
② 巧みな比喩表現  
③ 台風の被害  
④ 条約を批准する

(エ) マッタン

- 17 ① 真理の探究  
② 繊細な色彩の濃淡  
③ 単純で明快な考え  
④ 問題解決の端緒

(オ) ゲンシ

- 18 ① 日本語の起原  
② 魔術による眩惑  
③ 水源を遡る  
④ 範囲を限定する

問9 二重傍線部①～③の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

19

21

① 小耳にはさむ

19

② 敏感に聞きつける

② 子供が聞き伝える

③ 偶然に聞きつける

④ ちらりと聞きつける

④ ミソでありまして

20

① 価値や性質の違いを一まとめにしたものであって

② 苦労してでも手に入れたいものであって

③ 意味のある大事なところであって

④ しっかりと心をこめるところであって

③ 腹が据わる

21

① 覚悟が定まる

② 怒りや恨みがおさまる

③ 度量が大きくなる

④ 心を通じ合わせる

問10 傍線部(1)「この、偶然的なことが絶対的であるという原点」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。解答番号は 22

① 自分の現存在は、生まれながらに祖先から受け継いだ血縁で支えられており、この繋がりは己の意志ではどうにもできないという人間の在り様

② 自分の現存在は、先天的に与えられているものであるが、己の意志によりどうにでも望ましいものに改変していけるとい  
う人間の在り様

③ 自分の現存在は、己の意志とは関わりのない、思いがけないものであり、その付与された境遇を全的に背負わざるを得ない人間の在り様

④ 自分の現存在は、後天的な学問や心身の修練によってどうにでもなりうるものであるが、生まれ持った才能はどうにもならない人間の在り様

問11 傍線部(2)「その大変さが、大変でありながら、ある意味では大変でなくなるんですよ。」とあるが、その説明として最も適

当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。解答番号は

23

① 他の誰とも異なる自分の人生であるからこそ、かけがえがなく、価値あるものだと思えたとかえって有り難いものとしてより努力しようと前向きの気持ちになる。

② 他の誰とも異なる自分の人生を逃れられないものと窮屈にとらえると苦しいものとなるが、一方で自分は囚らずもこういう在り方で生きているのだという見方をすれば楽な気持ちになる。

③ 他の誰とも異なる自分の人生ではあっても、世間一般の人々と同じように平凡でよいと思えれば無理に自分を追い込むこともなく安らかな気持ちになる。

④ 他の誰とも異なる自分の人生だからこそ、他者は自分と同じではあり得ないと捉えたと自分の個性の絶対性が確認でき自信にみちた気持ちになる。

問12 本文中の空欄 I に入る言葉として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 24

- ① 虚も実
- ② 悪も善
- ③ 逆も真
- ④ 無も有

問13 傍線部(3)「人生とは妙なものだ」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 25

- ① 人の生は、結局のところ生きるか死ぬかという問題にいきつくが、死を相対化して捉えると、生は自由で気楽なものとして感じられる。
- ② 人の生は、死を意識することによって逆に、生きていることのおかげがえのなさがより強く自覚され、今まで以上に意味あるものに深められる。
- ③ 人の生は、いついかなる時に死に直面するか予測できず、死を畏れながら生きていかざるを得ないが、このことが生の実質を豊かなものにしていく。
- ④ 人の生は、自分一人で作り上げようとすれば苦勞の多いものだが、歴史上の様々な人の生き様を参照すれば多様で柔軟なものになる。

問14 傍線部(4)「考えにおける極端が、暮らしにおける中庸として現われる」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中

から一つ選んで、番号で答えよ。解答番号は 26

① 思考の中で、生を美化し、生活の豊かさを絶対視すれば、日常生活の苦しさや辛さよりもその時の楽しさや喜びを求めるようになり、生活が明るくなる。

② 思考の中で、死の不可避性を絶対的なものであると捉えると、逆に現在の意味深さが自覚され意欲的な生を求めるようになる。

③ 思考の中で、人間の生のはかなさ、無常さを絶対視する立場に立てば、現実への執着がなくなり、何にも左右されない自立したものになる。

④ 思考の中で、死という絶対的視点で生を相対化すれば、現実の生が窮屈で苦しいものではなく、何ものにも縛られない自由なものになる。

